

校異源氏物語・あかし

なを雨風やます神なりしつまらて日ころになりぬいと、物わひしき事かすしらすきしかた行ききかなしき御ありさまに心つようしもえおほしなすいかにせましかゝりとて都に帰らんこともまたよにゆるされもなくては人わらはれなることこそまさらめ猶これよりふかき山をもとめてやあとたえなましとおほすにも浪かせにさはかれてなど人のいひつたへん事後の世までいとかろくしき名やなかしはてんとおほしみたる夢にもたゝおなしさまなる物のみきつゝまつはしきこゆとみ給雲まなくてあけるゝ日数にそへて京の方もいとゝおほつかなくかくなから身をはふらかしつるにやと心ほそうおほせとかしらさしいつへくもあらぬそらのみたれにいてたちまいる人もなし二条院よりそあなちにあやしきすかたにてそをちまいれるみちかひにてたに人かなにそとたに御覽しわくへくもあらずまつをひはらひつへきしつのおのむつまう哀におほさるゝもわれなからかたしけなくゝしにける心のほと思ひしらす御文にあさましくをやみなきころのけしきにいとゝ空さへとつる心ちしてなかめやるかたなくなむ

浦風やいかに吹らむおもひやる袖うちぬらし波まなきころ哀にかなしき事

ともかきあつめ給へりいとゝみきはまさりぬへくかきくらす心ちし給京にもこの雨風あやしき物のさとしなりとて仁王会とおこなはるへしとなむきこえ侍し内にまいり給かんたちめなともすへてみちとちてまつりこともたえてなむ侍などとはかくしうもあらずかたくなしうかたりなせと京の方のことゝおほせはいふかしうて御まへにめしいてゝとはせ給たゝれいの雨のをやみなくふりて風は時く吹いてて日ころになり侍をれいならぬことにおとろき侍なりいとかく地のそことほるはかりのひふりいかつちのしつたらぬことは侍らさりきなといみしきさまにおとろきおちてをるかほのいとからきにも心ほそさまさりけるかくしつゝ世はつきぬへきにやとおほさるゝにその又の日のあかつきより風いみしうふきしほたかうみちて浪のをとあらき事はほも山ものこるましきけしきなり神のなりひらめくさまさらにいはむかたなくおちかゝりぬとおほゆるにあるかきりさかしき人なしわれはいかなるつみをゝかしてかくかなしき目をみるらむちゝはゝにもあひみすかなしきめこのかほをもみてしぬへきことゝなけ

く君は御心をしつめてなにはかりのあやまちにてかこのなききに命をはきはめ
んとつようおほしなせといと物さはかしければ色／＼のみてくらさゝけさせ給
て住吉の神ちかきさかひをしつめまもり給まことにあとをたれ給神ならはたす
け給へとおほくの大願をたて給をのをの身つからの命をはさる物にてかゝる御
身のまたなきれいにしつみ給ぬへきことのいみしうかなしき心をゝこしてすこ
し物おほゆるかきりは身にかえてこの御身ひとつをすくいたてまつらむとよ
みてもろこゑに仏神を念したてまつる帝王のふかき宮にやしなはれ給て色色の
たのしみにおこり給しかとふかき御うつくしみおほやしまにあまねくしつめる
ともからをこそおほくうかへ給しかいまなにのむくひにかこゝらよこさまなる
浪風にはおほゝれ給はむ天地ことはり給へつみなくてつみにあたりつかさ位を
とられ家をはなれさかひをさりて明くれやすきそらなくなけき給にかくかなし
きめをさへみ命つきなんとするはさきの世のむくひか此世のをかしか神仏あき
らかにましまさはこのうれへやすめ給へとみ社のかたにむきてさま／＼の願を
たて給又海のなかのりうわうよろつの神たちに願をたてさせ給にいよくなり
とゝろきておはしますにつゝきたるらうにおちかゝりぬほのをもえあかりてら
うはやけぬ心たましゐなくてあるかきりまとふうしろのかたなるおほるとのと
おほしき屋にうつしたてまつりてかみ下となくたちこみていとらうかはしくな
きとよむ声いかつちにもをとらす空はすみをすりたるやうにて日も暮にけりや
うやう風なをり雨のあしゝめり星の光もみゆるにこのおまし所のいとめつらか
なるもいとかたしけなくてしん殿にかへしうつしたてまつらむとするにやけの
こりたるかたもうとましけにそこらの人のふみとゝろかしまとへるにみすなと
もみなふきちらしてけり夜をあかしてこそはととりあへるに君は御ねんすし
給ておほしめくらすにいと心あはたゝし月さしいてゝしほのちかくみちきける
あともあらはになこり猶よせ帰波あらきを柴の戸をしあけてなかめをはします
ちかき世界に物の心をしりきしかた行ききのことうちおほえとやかくやとはか
はかしうさとる人もなしあやしきあまともなどのたかき人おはする所とてあつ
まりまいりてきゝもしり給はぬことゝもをさえつりあへるもいとめつらかなれ
とえをひもはらはすこの風いましはしやまさらましかはしほのほりてのこる所
なからまし神のたすけをろかならざりけりといふをきゝ給もいと心ほそしとい
へはをろか也

海にます神のたすけにかゝらすはしほのやをあひにさすらへなましひねも

すにいりもみつる神のさはきにさこそいへいたうこうし給にければ心にもあら

すうちまとろみ給かたしけなきおまし所なればたゝより居給へるに故院たゝおはしましゝさまなからたち給てなどかくあやしき所に物するそとて御てをとりてひきたて給住吉の神のみちひき給まゝにははやふなてしてこの浦をさりねとの給はすいとうれしくてかしこき御影にわかれたてまつりにしこなたさまゝかなしき事のみおほく侍れはいまはこのなきさに身をやすて侍なましときこえ給へはいとあるましきことこれはたゝいさゝかなる物のむくひなり我は位にありし時あやまつことなかりしかとをのつからをかしありければそのつみをおふる程いとまなくてこの世をかへりみさりつれといみしきうれへにしつむをみるにたへかたくてうみにいりなきさにのほりいたくこうしにたれとかゝるついでに内裏にそうすへきことのあるによりなむいそきのほりぬるとてたちさり給ぬあかすかなしくて御ともにまいりなるとなきいきり給てみあげ給へれば人もなく月のかほのみきらゝとして夢の心ちもせず御けはひとまれるこゝちして空の雲哀にたなひけり年比夢の内にもみたてまつらてこひしうおほつかなき御さまをほのかなれとさたかにみたてまつりつるのみ面かけにおほえ給て我かくかなしひをきはめ命つきなんとしつるをたすけにかけり給へると哀におほすによくそかゝるさはきもありけるとなこりたのもしうゝれしうおほえ給ことかきりなしむねつとふたかりて中ゝなる御心まとひにうつゝのかなしきこともうち忘夢にも御いらへをいますこしきこえすなりぬることゝいふせさに又やみえ給ふとことさらにね入給へとさらに御めもあはてあか月かたに成にけりなきさにちいさやかなる舟よせて人二三人はかりこの旅の御やとりをさしてまいるなに人ならむとゝへは明石の浦よりさきのかみしほちの御ふねよそひてまいれる也源少納言さふらひ給はゝたいめして事の心とり申さんといふよしきよおとろきて入道はかの国のとくるにて年ころあひかたらひ侍れとわたくしにいさゝかあひうらむること侍てことなるせうそをたにかよはさてひさしうなり侍ぬるを浪のまきれにいかなることかあらむとおほめく君の御夢などもおほしあはすることもありてはやあへとの給へは舟にいきてあひたりさはかりはけしかりつる波かせにいつのまにかふなてしつらむと心えかたくおもへりいぬるついたちのひ夢にさまことなる物のつけしらすること侍しかはしむしかたき事とおもふ給へしかと十三日にあらたなるしるしませむ舟よそひまうけてかならず雨風やまはこの浦にをよせよとかねてしめすことの侍しかは心みに舟のよそひをまうけてまち侍しにいかめしき雨風いかつちのおとろかし侍つれば人の御かとも夢をしむして国をたすくたくひおほう侍けるをもちゐさせ給はぬまでもこのいま

しめの日をすくさすこのよしをつけ申侍らんとて舟いたし侍つるにあやしき風
ほそう吹てこの浦につき侍ることまことに神のしるへたかはすなんこゝにもも
ししろしめすことや侍つらんとてなむいとはゝかりおほく侍れとこのよし申給
へといふよしきよ忍やかにつたへ申君おほしまはすにゆめうつゝさまくしつ
かならずさとしのやうなる事共をきしかた行末おほしあはせてよの人のきゝつ
たへん後のそしりもやすからさるへきををはゝかりてまことの神のたすけにもあ
らむをそむく物ならば又これよりまさりて人わらはれるめをやみむうつゝさ
まの人の心たに猶くるしはかなきことをもつゝみて我よりよはひまさりもしは
位たかく時よのよせいま一きはまさる人にはなひきしたかひてその心むけをた
とるへき物なりけりしりそきてとかなしとこそ昔さかしき人もいひをきけれけ
にかく命をきはめよに又なきめのかきりをみつくしつさらにのちのあの名を
はふくとてもたけき事もあらし夢の中にもちゝ御門の御をしへありつれば又な
にことかうたかはむとおほして御返の給しらぬせかいにめつらしきうれへのか
きりみつれと宮この方よりとてことゝひをこする人もなしたゝ行ゑなき空の月
日の光はかりを故郷の友となかめ侍にうれしきつり舟をなむかの浦にしつやか
にかくろふへきくま侍りなんやとの給かきりなくよろこひかしこまり申ともあ
れかくもあれ夜の明はてぬさきに御舟にたてまつれとてれのしたしきかきり
四五人はかりしてたてまつりぬれいの風いてきてとふやうにあかしにつき給ぬ
たゝはひわたる程にかた時のまといへと猶あやしきまてみゆる風の心なりはま
のさまけにいと心ことなり人しけうみゆるのみなむ御ねかひにそむきける入道
のらうしめたる所くうみのつらにも山かくれにもときくにつけてけふをさ
かすへきなきさのとまやおこなひをして後世のことを思ひすましつへき山みつ
のつらにいかめしきたうをたてゝ三昧をおこなひ此世のまうけに秋のたのみを
かりをさめのこりのよはひつむへきいねのくらまちともなとおりく所につけ
たるみ所ありてしあつめたりたかしほにおちてこの比むすめなどはをかへのや
とにうつしてすませければこのはまのたちに心やすくおはします舟より御車に
たてまつりうつるほと日やうくさしあかりてほのかにみたてまつるより老わ
すれよはひのふる心ちしてゑみさかへてまつ住吉の神をかつくおかみたてま
つる月日の光をてにえたてまつりたる心ちしていとなみつかうまつる事ことは
りなり所のさまをはさらにもいはすつくりなしたる心はへ木たちたていしせむ
さいなどのありさまえもいはぬ入江の水なとゑにかゝは心のいたりすくなから
んゑしはかきをよふましとみゆ月ころの御すまるよりはこよなくあきらかにな

つかしき御しつらひなとえならすしてすまゐけるさまなとけに都のやむことなき所く／＼にことならすえむにまはゆきさまはまさりさまにそみゆるすこし御心しつまりては京の御文ともきこえ給まいれりし使はいまはしみきみちにいてたちてかなしきめをみるとなきしつみてあのすまにとまりたるをめして身にあまれる物とおほくたまひてつかはすむつまじき御いのりのしもさるへき所く／＼にはこの程の御ありさまくはしくいひつかはすへし入道の宮はかりにはめつらかにてよみ帰さまなときこえ給二条院のあはれなりしほどの御かへりはかきもやり給はすうちをきく／＼をしのかひつゝきこえ給御けしき猶ことなり返くゝいみしきめのかきりをつくしはてつるありさまなれはいまはと世を思ひはなるゝ心のみまさり侍れとかゝみをみてもとの給し面かけのはなるゝよなきをかくおほつかななからやとこゝらかなしきさまく／＼のうれはしきはさしをかれ

はるかにもおもひやるかなしらさりし浦よりをちにうらつたひして夢の内なる心ちのみしてさめはてぬほといかにひかことおほからむとけにそこはかとなくかきみたり給へるしもそいとみまほしきそはめなるをいとこよなき御心さしのほどゝ人く／＼みたてまつるをのく／＼故郷に心ほそけなることつてすへかめりをやみなかりし空のけしきなこりなくすみわたりてあさりするあまともほこらしけなりすまはいと心ほそくあまのいはやもまれなりしを人しけきいとひはし給しかとこゝは又さまことにあはれなることおほくてよろつにおほしなくさまるあかしの入道おこなひつとめたるさまいみしう思ひすましたるをたゝこのむすめひとりをもてわつらひたるけしきいとかたはらいたきまで時く／＼もらしうれへきこゆ御心ちにもおかしときゝをき給し人なれはかくおほえなくてめくりおはしたるもさるへき契あるにやとおほしなから猶かう身をしつめたる程はおこなひよりほかの事は思はし宮この人もたゝなるよりはいひしにたかふとおほさむも心はつかしうおほさるれはけしきたち給ことなしことにふれて心はせありさまなへてならすもありけるかなとゆかしうおほされぬにしもあらずこゝにはかしこまりてみつからをもさく／＼まいらすものへたゝりたるしものやにさふらふさるはあけくれみたてまつらまほしうあかすおもひきこえておもふ心をかなへむと仏神をいよく／＼ねんしたてまつるとしは六十はかりになりたれといときよけにあらまほしうおこなひさらほひて人のほとのおてはかなれはにやあらむうちひかみほれく／＼しきことはあれといにしへのことをもしりて物きたなからすよしつきたることもましれゝは昔物かたりなとせさせてきゝ給にすこし

つれ／＼のまきれなりとし比おほやけたくし御いとまなくてさしもき、をき給はぬよのふること、もくつしいて、かゝる所をも人をもみさらましかはさう／＼しくやとまてけふありとおほす事もましかうはなれきこゆれといとけたかう心はつかしき御ありさまにさこそいひしかつ、ましうなりて我おもふことは心のまゝにもえうちいてきこえぬを心もとなうくちおしとは、君といひあはせてなけくさうしみをしなへての人たにめやすきはみえぬせかいに世にはかゝる人もおはしけりとみたてまつりしにつけて身の程しられていとはるかにそ思ひきこえけるおやたちのかくおもひあつかふをきくにもにけなきことかなと思にたゝなるよりは物あはれなり四月になりぬ衣かへの御さうそく御丁のかたひらなとよしあるさまにしいてつゝよろつにつかうまつりいとなむをいとおしうすゝろなりとおほせと人さまのあくまで思あかりたるさまのあてなるにおほしゆるしてみ給京よりもうちしきりたる御とふらひとたゆみなくおほかりのとやかなる夕月夜にうみのうへくもりなくみえわたれるもすみなれ給し故郷の池水思ひまかへられ給にいはむかたなくこひしきこといつかたとなく行ゑなき心ちし給てたゝめのまへにみやらるゝはあはちしま成けりあはとはるかになの給て

あはとみるあはちのしまのあはれさへのこるくまなくすめるよの月ひさしうてふれ給はぬきむをふくろよりとりいて給てはかなくかきならし給へる御さまをみたてまつる人もやすからす哀にかなしうおもひあへりかうれうといふてをあるかきりひきすまし給へるにかのをかへの家も松のひゝき波の音にあひて心はせあるわか人は身にしみておもふへかめりなにともきゝわくましきこのもかのものしはふる人ともゝすゝろはしくはま風をひきありく入道もえたへてくやう法たゆみていそきまいれりさらにそむきにし世の中もとるかへし思ひいてぬへく侍りのちの世にねかひ侍ところのありさまもおもふ給へやらるゝ夜のさまかなとなく／＼めてきこゆ我御心にもおり／＼の御あそひその人かの人のことふえもしはこゑのいてしさまに時／＼につけてよにめてられ給しありさまみかとよりはしめたてまつりてもてかしつきあかめたてまつり給しを人のうへも我御身のありさまもおほしいてられて夢の心ちし給まゝにかきならし給へるこゑも心すこきこゆる人は涙もとゝめあへすをかへにひわ笙のことゝりにやりて入道ひわの法師になりていとおかしうめつらしきてひとつふたつひきたりさうの御ことまいりたればすこしひき給もさま／＼いみしうのみ思ひきこえたりいとさしもきこえぬ物のねたにおりからこそはまさるものなるをはる／＼と

物のとゝこほりなき海つらなるに中々春秋のはなもみちのさかりなるよりは
たゝそこはかとなうしけれるかけともなまめかしきにくひなのうちたゝきたる
はたか門さしてと哀におほゆねもいとなういつることゝもをいとなつかしう
ひきならしたるも御心とまりてこれは女のなつかしきさまにてしとけなうひき
たるこそおかしけれと大方にの給を入道はあひなくうちゑみてあそはすよりな
つかしきさまなるはいつこのか侍らんなにかし延喜の御てよりひきつたへたる
ことしたいになんなり侍ぬるをかうつたなき身にてこの世のことはすてわすれ
侍ぬるを物のせちにいふせきおりくはかきならし侍しをあやしうまねふもの
ゝ侍こそしねむにかのせむ大王の御てにかよひて侍れ山ふしのひかみゝにまつ
かせをきゝわたし侍にやあらんいかてこれもしのひてきこしめさせてしかなど
きこゆるまゝにうちわなゝきて涙おとすへかめり君ことをことゝも聞給ましか
りけるあたりにねたきわさかなとてをしやり給にあやしう昔より笙は女なんひ
きとる物なりけるさかの御つたへにて女五の宮さる世のなかの上すに物し給け
るをその御すちにてとりたてゝつたふる人なしすへてたゝいま世に名をとれる
人くかきなての心やりはかりにのみあるをこゝにかうひきこめ給へりけるい
とけうありける事かないかてかはきくへきとの給きこしめさむにはなにのはゝ
かりか侍らんおまへにめしてもあき人のなかにてたにこそふることゝはやす
人は侍けれひわなむまことのねをひきしつむる人いにしへもかたう侍しをおさ
くくゝとゝこほることなうなつかしきてなとすちことになんいかてたとるにか侍
らんあらき浪のこゑにまじるはかなしくもおもふ給へられなからかきつむる物
なけかしさまきるゝおりくも侍りなとすきゑたれはおかしとおほしてさうの
こととりかへてたまはせたりけにいとすくつかいひきたりいまの世にきこえ
ぬすちひきつけてゝつかひいといたうからめきゆのねふかうすましたり伊勢の
海ならねときよきなきさにかひやひろはむなとこゑよき人にうたはせてわれも
時く拍しとりてこゑうちそへ給をことひきさしつゝめてきこゆ御くた物なと
めつらしきさまにてまいらせ人くにさけしひそしなとしてをのつから物わす
れしぬへき夜のさまなりいたく深行まゝにはま風すゝしうて月もいりかたにな
るまゝにすみまさりしつかなるほどに御物語のこりなくきこえてこの浦にすみ
はしめしほとん心つかひ後の世をつとむるさまかきくつしきこえてこのむすめ
のありさまとはすかたりにきこゆおかしきものゝさすかにあはれときゝ給ふし
もありいとゝり申かたき事なれとわかきみかうおほえなきせかいにかりにても
うつろひおはしましたるはもしとしころおいほうしのいのり申侍神仏のあはれ

ひおはしましてしはしのほと御心をなやましたてまつるにやとなんおもふたまふるそのゆゑはすみよしのかみをたのみはしめたてまつりてこの十八ねんになり侍ぬめのわらはいときなう侍しよりおもふ心侍てとしことの春秋ことにならずかの御やしるにまいることなむ侍ひるよるの六時のつとめにみつかからはちすのうへのねかひをはさるものにてたゝこの人をたかきほいかなへたまへとなんねんし侍さきのよのちきりつたなくてこそかくゝちおしき山かつとなり侍けめをや大臣のくらゐをたまちたまへりきみつかからかくゐなかのたみとなりにて侍りつきゝさのみおとりまからはなにの身にかなり侍らんとかなしく思侍をこれはむまれしときよりたのむところなん侍いかにして宮このたかき人にててまつらんと思ふ心ふかきによりほとゝにつけてあまたのひとのそねみをおひみのためからきめをみるをりゝもおほく侍れとさらにくるしみとおもひ侍らす命のかきりはせはき衣にもはくゝみ侍なむかくなからみすて侍なは浪のなかにもましりうせねとなんをきて侍なとすへてまねふへくもあらぬことゝもをうちなきうちなきゝこゆ君も物をさまゝおほしつゝくるおりからはうち涙くみつゝきこしめすよこさまのつみにあたりて思ひかけぬせかいにたゝよふもなにのつみにかとおほつかなく思ひつるこよひの御物かたりにきゝあはすればけにあさからぬさきの世のちきりにこそはと哀になむなとかはかくきたかに思ひしり給けることをいまゝてはつけ給はさりつらむ都はなれし時より世のつねなきもあちきなうおこなひよりほかの事なくて月日をふるに心もみなくつをれにけりかゝる人物し給とはほのきゝなからいたつら人をはゆゝしき物にこそおもひすて給らめと思ひくしつるをさらはみちひき給へきにこそあなれ心ほそきひとりねのなくさめにもなどの給をかきりなくうれしと思へりひとりねは君もしりぬやつれゝと思ひあかしのうらさひしさをまして年月おもひ給へわたるいふせさをゝしはからせ給へときこゆるけはひうちわなきたれとさすかにゆへなからすされとうらなれ給へらむ人はとてたひころもうらかなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはすとうちみたれ給へる御さまはいとそあいきやうつきいふよしなき御けはひなる数しらぬ事ともきこえつくしたれとうるさしやひかことゝもにかきなしたれはいとゝをこにかたくなしき入道の心はへもあらはれぬへかめりおもふことかつゝかなひぬる心ちしてすゝしう思ひあたるに又の日のひるつかたをかへに御文つかはす心はつかしきさまなめるも中ゝかゝる物のくまにそ思ひのほかなることこもるへかめると心つかひし給てこまのくるみ色のかみにえならすひきつくろひて

をちこちもしらぬ雲るになかめわひかすめしやとの木すゑをそとふおもふ

にはとはかりやありけん入道も人しれすまちきこゆとてかの家にきゐたりける
もしるければ御つかひいとまはゆきまでゑはす御返いとひさしうちにいりてそ
ゝのかせとむすめはさらにきかすはつかしけなる御文のさまにさしいてむてつ
きもはつかしうつゝまし人の御程我身のほと思にこよなくて心ちあしとてより
ふしぬいひわひて入道そかくいとかしこきはゐなかひて侍るたもにつゝみあ
まりぬるにやさらにみたまへもをよひ侍らぬかしこきになんさるは

なかむらんおなし雲るをなかむるは思ひもおなし思ひなるらむとなんみ給

るいとすきくしやときこえたりみちのくにかみにいたうふるめきたれとかき
さまよしはみたりけにもすきたるかなとめさましうみ給御つかひになへてなら
ぬたまもなとかつたり又の日せんしかきはみしらすなんとて

いふせくもこゝろにものをなやむかなやよいかにとゝふ人もなみいひか

たみとこのたひはいといたうなよひたるうすやうにいとつくしけにかきたま
へりわかき人のめてさらむもいとあまりむれいたからむめてたしとはみれと
なすらひならぬ身の程のいみしうかひなければ中く世にあるものとたつねしり
り給につけて涙くまれてさらにれいのとうなきをせめていはれてあさからすし
めたるむらさきのかみにすみつきこくうすくまきはして

おもふらんこゝろのほとやゝよいかにまたみぬ人のきゝかなやまむてのさ

まかきたるさまなとやむことなき人にいたうをとるましう上すめきたり京のこ
とおほえておかしとみ給へとうちしきりてつかはさむも人めつゝましかれば二
三日へたてつゝつれくくなる夕くれもしは物あはれなる明ほのなとやうにまき
らはしておりくおなし心にみしりぬへき程をしはかりてかきかはし給ににけ
なからす心ふかう思ひあかりたるけしきもみてはやましとおほす物からよしき
よからうしていひしけしきもめさましう年比心つけてあらむをめのまへに思ひ
たかへんもいとおしうおほしめくらされて人すゝみまいらはさるかたにてもま
きははしてんとおほせと女はた中くやむことなきゝはの人よりもいたう思ひ
あかりてねたけにもてなしきこえたれは心くらへにてそすきける京のことをか
く関へたゝりてはいよくおほつかなく思ひきこえ給ていかにせましたはふれ
にくゝもあるかなしのひてやむかへたてまつりてましとおほしよはるをりく
あれとさりとにかくてやはとしをかさねんといまさらに人わろき事をはとおほ
ししつめたりそのとしおほやけにものゝさとししきりて物さはかしき事おほか
り三月十三日かみなりひらめき雨風さはかしき夜みかとの御夢に院の御門御ま

へのみはしのもとにたゝせ給て御けしきいとあしうてにらみきこえさせ給をか
しこまりておはしますきこえさせ給こともおほかり源氏の御事なりけんかしい
とおそろしういとおしとおほしてきさきにきこえさせ給ければ雨なとふり空み
たれたる夜は思なしなることはさそ侍るかろくしきやうにおほしおとろくま
しきことゝきこえ給にらみ給しにめみあはせ給とみしけにや御めわつらひ給て
たへかたうなやみ給御つゝしみ内にも宮にもかきりなくせさせ給おほきおとゝ
うせ給ぬことはりの御よはひなれとつきくをのつからさはかしきことある
に大宮もそこはかとなうわつらひ給て程ふれはよはり給やうなる内におほしな
けくことさまくなりなを此源氏の君まことにおかしなきにてかくしつむなら
はかならずこのむくひありなんとなむおほえ侍いまは猶もとのくらゐをもたま
ひてむとたひくおほしの給を世のときかろくしきやうなるへしつみにお
ちて都をさりし人を三ねんをたにすくさすゆるされむことはよの人もいかゝい
ひつたへ侍らんときさきかたくいさめ給におほしはゝかるほどに月日かさな
りて御なやみともさまくををりまさらせ給あかしにはれいの秋浜風のこと
なるにひとりねもまめやかに物わひしうて入道にもおりくかたらはせ給とか
くまきはしてこちまいらせよとのたまいてわたり給はむことをはあるましう
おほしたるをさうしみはたさらに思たつへくもあらずいとくちおしきゝはのゑ
中人こそかりにくたりたる人のうちとけことにつきてさやうにかろらにかた
らふわさをもすなれ人数にもおほされさん物ゆへわれはいみしき物思ひをや
そへんかくをよひなき心をおもへるおやたちもよこもりてすす年月こそあい
なたのみに行すゑ心にくゝ思らめ中くなる心をやつくさむと思ひてたゝこの
浦にをはせん程かゝる御文はかりをきこえかはさむこそをろかなね年比をと
にのみ聞ていつかはさる人の御ありさまをほのかにもみたてまつらんと思ひ
かけさりし御すまゐにてまほならねとほのかにもみたてまつりよになき物とき
ゝつたへし御ことのねをも風につけてきゝ明くれの御ありさまおほつかなから
てかくまてよにある物とおほしたつぬるなどこそかゝるあまのなかにくちぬる
身にあまることなれなどおもふにいよくはつかしうて露もけちかきことは思
ひよらすおやたちはこゝらの年比のいのりかなふへきを思ひながらゆくりか
にみせたてまつりておほし数まへさん時いかなるなけきをかせんと思やるに
ゆゝしくてめてたき人ときこゆともつらういみしうもあるへき哉めにもみえぬ
仏神をたのみたてまつりて人の御心をもすくせをもしらてなとうちかへし思ひ
みたれたり君はこの比の波のをとにかの物のねをきかはやさらすはかひなくこ

そなとつねはの給しのひてよろしき日みては、君のとかく思ひわつらふをき、
いれすてしともなとにたにしらせす心ひとつにたちゐるか、やくはかりしつらひ
て十三日の月の花やかにさしいてたるにた、あたら夜るときこえたり君はすぎ
のさまやとおほせと御なをしたてまつりひきつくろひて夜ふかしていて給御く
るまはなくなつくりたれと所せしとて御むまにて出給これみつなとはかりをさ
ふらはせ給や、とをくいる所なりけりみちの程もよもの浦くみわたし給てお
もふとちみまほしき入江の月影にもまつこひしき人の御事を思ひ出きこえ給に
やかてむまひきすきておもむきぬへくおほす

秋のよの月けのこまよわかこふる雲ゐをかけれときのまもみんとうちひと

りこたれ給つくれるさまこふかくいたき所まさりて見所あるすまるなりうみの
つらはいかめしうおもしろくこれは心ほそくすみたるさまこ、にゐて思ひのこ
すことはあらしとおほしやらるゝに物哀なり三昧たうちかくてかねの声松かせ
にひゝきあひて物かなしういはにおひたる松の根さしも心はへあるさまなり前
栽ともに虫のこゑをつくしたりこゝかしこのありさまなと御覧すむすめすませ
たる方は心ことにみかきて月いたるま木の戸くちけしきはかりをしあけたり
うちやすらひなにかとの給にもかうまてはみえたてまつらしとふかう思に物な
けかしうてうちとけぬ心さまをことなうも人めきたるかなさしもあるましきき
はの人たにかはかりいひよりぬれは心つようしもあらずならひたりしをいとか
くやつれたるにあなつらはしきにやとねたうさまくにおほしなやめりなさけ
なうをしたゝむもことのさまにたかへり心くらへにまけんこそ人わろけれなど
みたれうらみ給さまけに物思ひしらむ人にこそみせまほしけれちかき木丁のひ
もにさうのこのひきならされたるもけはひしとけなくうちとけなからかきま
さくりける程みえておかしければこのきゝならしたることをさへやなとよろつ
にのたまふ

むつことをかたりあはせむ人もかなうき世の夢もなかはさむやと

あけぬ夜にやかてまとへる心にはいつれを夢とわきてかたらむほのかなる

けはひ伊勢のみやす所にいとようおほえたりなに心もなくうちとけてゐたりけ
るをかう物おほえぬにいとわりなくてちかゝりけるさうしのうちに入ていかて
かためけるにかいとつよきをしゐてもをしたち給はぬさまなりされとさのみも
いかてかあらむ人さまいとあてにそひへて心はつかしきけはひそしたるかうあ
なかなりける契をおほすにもあさからすあはれなり御心さしのちかまさりす
るなるへしつねはいとはしき夜のなかさもとく明ぬる心ちすれば人にしられし

とおほすも心あはたゝしうてこまかにかたらひをきていて給ぬ御文いとしのひ
てそけふはあるあひなき御心のおになりやこゝにもかゝることいかでもらさし
とつゝみて御つかひこととしうもゝてなさぬをむねいたくおもへりかくて後
はしのひつゝ時〱おはす程もすこしはなれたるにをのつから物いひさかなき
あまのこもやたちましらんとおほしはゝかる程をされはよと思ひなけきたるを
けにいかならむと入道も極樂のねかひをは忘てたゝこの御けしきをまつことに
はすいまさらに心をみたるもいと〱おしけなり二条の君の風のつてにももり
きゝ給はむ事はたはふれにても心のへたてありけると思ふとまれたてまつらん
こゝろくるしうはつかしうおほさるゝもあなかななる御心さしのほとなりかし
かゝる方のことをはさすかに心とゝめてうらみ給へりしおり〱なとてあやな
きすさひことにつけてもさ思はれたてまつりけむなどゝりかへさまほしう人の
ありさまをみ給につけてもこひしさのなくさむかたなければいよりも御文こ
まやかにかき給てまことやわれなから心よりほかなる猶さりことにてうとまれ
たてまつりしふし〱を思出さへむねいたきに又あやしうものはかなき夢をこ
そみ侍しかゝうきこゆるとはすかたりにへたてなき心の程はおほしあはせよ
かひしこともなとかきてなにことにつけても

しほ〱とまつそなかるゝかりそめのみるめはあまのすさひなれともとあ

る御返なに心なくらうたけにかきて忍ひかねたる御夢かたりにつけても思ひあ
はせらるゝことおほかるを

うらなくも思ひけるかなちきりしを松より波はこえし物そとおひらかなる

物からたゝならすかすめ給へるをいと哀にうちをきかたくみ給てなこりひさし
うしのひの旅ねもし給はす女思しもしるきにいまそまことに身もなけつへき心
ちする行すゑみしかけなるおやはかりをたのもしき物にていつの世に人なみ
〱になるへき身と思はさりしかとたゝそこはかとなってすくしつるとし月は
なにことをか心をなやましけむかういみしう物思はしき世にこそありけれと
かねてをしはかり思ひしよりもよろつにかなしけれとなたらかにもてなしてに
くからぬさまにみえたてまつるあはれとは月日にそへておほしませとやむこと
なきかたのおほつかなくて年月をすくし給ひたゝならすうち思ひをこせ給らむ
かいと心くるしければひとりふしかちにすすし給ゑをさまさまかきあつめて
思ことゝもをかきつけ返こときくへきさまにしなし給へりみむ人の心にしみぬ
へき物のさまなりいかてか空にかよふ御心ならむ二条の君も物あはれになくさ
む方なくおほえ給おり〱おなしやうにゑをかきあつめ給つゝやかて我御あり

さまにきのやうにかき給へりいかなるへき御さまともにかあらむ年かはりぬ内に御くすりのことありて世中さま／＼にのゝしるたうたいの御こは右大臣のむすめ承香殿の女御の御はらにおとこみこむまれ給へる二になり給へはいといはけなし春宮にこそはゆつりきこえ給はめおほやけの御うしろみをし世をまつりこつへき人をおほしめくらすにこの源氏のかくしつみ給こといとあたらしいあるましきことなれはつるに後の御いさめをそむきてゆるされ給へきさためいきぬこそより後も御物のけなやみ給いさま／＼の物のさとしゝきりさはかしきをいみしき御つゝしみともをし給しるしにやよろしうおはしましける御めのなやみさへこの比をもくならせ給て物心ほそくおほされければ七月廿よ日の程に又かさねて京へかへり給へき宣旨くたるつゐることゝおもひしかとよのつねなきにつけてもいかなりなはつへきにかとなけき給をかうにはかなれはうれしきにそへても又この浦を今はと思はなれむことをおほしなけくに入道さるへき事と思ひなからうちきくよりむねふたかりておほゆれと思ひのことさかへ給はゝこそは我おもひのかなふにはあらめなと思ひなをすそのころはよかれなくかたらひ給六月はかりより心くるしきけしきありてなやみけりかくわかれ給へきほとなれはあやになるにやありけむありしよりも哀におほしてあやしう物思へき身にも有けるかなとおほしみたる女はさらにもいはすおもひしつみたりいとはりなりや思ひのほかになしきみちにいてたち給しかとつゐには行めくりきなむとかつはおほしなくさめきこのたひはうれしき方の御いてたちの又やは帰みるへきとおほすにあはれなりさふらふ人／＼ほと／＼につけてはよろこひおもふ京よりも御むかへに人／＼まいり心地よけなるをあるしの入道涙にくれて月もたちぬ程さへ哀なる空のけしきになそや心つから今も昔もすゝろなる事にて身をはふらかすらむとさま／＼におほしみたれたるを心しれる人／＼はあなにくれいの御くせそとみたてまつりむつかるめり月ころは露人にけしきみせず時／＼はひまきれなどし給へるつれなさをこの比あやにくに中／＼の人の心つくしにかとつきしろふ少納言しるへしてきこえてしはしめの事などさゝめきあへるをたゝならすおもへりあさてはかりに成てれいのやうにいたくもふかさてわたり給へりさやかにもまたみたまはぬかたちなといとよし／＼しうけたかきさましてめさましうもありけるかなとみすてかたくゝちをしうおほさるさるへきさまにしてむかへむとおほしなりぬさやうにそかたらひなくさめ給おとこの御かたちありさまはたさらにもいはすとしころの御おこなひにいたくおもやせ給へるしもいふかたなくめてたき御ありさまにて心くるしけなるけしき

にうち涙くみつゝあはれふかく契給へるはたゝかはかりをさいはひにてもなとかやまさらむとまでそみゆめれとめてたきにしも我身の程をおもふもつきせす波の声秋の風には猶ひゝきことなり塩やく煙かすかにたなひきてとりあつめたる所のさまなり

このたひはたちわかるともゝしほやくけふりはおなしかたになひかむとのたまへは

かきつめてあまのたくものおもひにもいまはかひなきうらみたにせし哀にうちなきてことすくなゝる物からさるへきふしの御いらへなとあさからすきこゆこのつねにゆかしかり給物のねなとさらにきかせたてまつらさりつるをいみしううらみ給さらはかたみにもしのふはかりの一ことをたにとの給て京よりもてをはしたりしきんの御ことゝりにつかはして心ことなるしらへをほのかにかきならし給へるふかき夜のすめるはたとへんかたなし入道えたへてさうのこととりてさしいれたり身つからもいとゝ涙さへそゝのかされてとゝむへきかたなきにさそはるゝなるへしゝのひやかにしらへたる程いと上すめきたり入道の宮の御ことのねをたゝいまの又なき物に思ひきこえたるはいまめかしうあなめてたときく人の心ゆきてかたちさへ思やらるゝことはけにいとかりなき御ことのねなりこれはあくまでひきすまし心にくゝねたきねそまされるこの御心にたにはしめてあはれになつかしうまたみゝなれ給はぬてなと心やましきほとにひきさしつゝあかすおほさるゝにも月ころなとしゐても聞ならさゝりつらむとくやしうおほさる心のかきり行さきの契をのみし給きんは又かきあはするまでのかたみにとのたまふおんな

猶さらにたのめをくめるひとことをつきせぬねにやかけてしのはんいふともなきくちすさひをうらみ給て

あふまでのかたみにちきる中のをのしらへはことにかはらさるなむこのねたかはぬさきにならすあひみむとたのめ給めりされとたゝわかれむ程のわりなさをおもひむせたるもいとことはりなりたち給あか月は夜ふかくいて給て御むかへの人ゝもさはかしければ心も空なれと人まをはからひて

うちすてゝたつもかなしきうら波のなこりいかにと思ひやるかな御返年へつるとまやもあれてうき波のかへるかたにや身をたくへましとうち思

ひけるまゝなるをみ給にしのひ給へとほろゝとこほれぬ心しらぬ人ゝは猶かゝる御すまひなれとゝしころといふはかりなれ給へるをいまはとおほすはさもあることそかしなとみたてまつるよしきよなとはをろかならすおほすなむめ

りかしとにくゝ、そううれしきにもけにけふをかきりにこのなきさをわかるゝ、
となど哀かりてくちくしほたれいひあへる事ともあめりされとなにかはとて
なむ入道けふの御まうけいとかめしうつかうまつれり人ゝしものしなまて旅
のさうそくめつらしきさまなりいつのまにかしあへけむとみえたり御よそひは
いふへくもあらすみそひつあまたかけたまはすまことの都のつとにしつへき御
をくり物ともゆへつきて思ひよらぬくまなしけふたてまつるへきかりの御さう
そくに

よる波にたちかさねたるたひ衣しほとけしとや人のいとはむとあるを御覧
しつけてさはかしけれと

かたみにそかふへかりけるあふことの日かすへたてん中のころもをとて心
さしあるをとてたてまつりかふ御身になれたるをもつかはすけにいまひとへ
しのはれ給へきことをそふる形見なめりえならぬ御そにゝほひのうつりたるを
いかゝ人の心にもしめさらむ入道いまはと世をはなれ侍にし身なれともけふの
御をくりにつかうまつらぬことなど申てかひをつくるもいとをしなからわかき
人はわらひぬへし

よをうみにこゝらしほしむ身と成て猶このきしをえこそはなれね心のやみ
はいとゝまとひぬへく侍れはさかひまでたにときこえてすきくしきさまなれ
とおほしいてさせ給おり侍らはなど御けしき給はるいみしう物を哀とおほして
所くうちあかみ給へる御まみのわたりなといはむかたなくみえ給思ひすてか
たきすちもあめれはいまいとゝくみなをし給てむたゝこのすみかこそみすてか
たけれいかゝすへきとて

宮こいてし春のなけきにおとらめやとしふる浦をわかれぬる秋とてをし
こひ給へるにいとゝ物おほえすしほたれまさるたちゐもあさましうよろほふさ
うしみの心ちたとふへきかたなくてかうしも人にみえしと思ひしつむれと身の
うきをもとにてわりなきことなれとうちすて給へるうらみのやるかたなきにた
けきことゝはたゝ涙にしつめりはゝ君もなくさめわひてはなにゝかく心つくし
なることを思ひそめけむすへてひかくしき人にしたかひける心のをこたりそ
といふあなかまやおほしすつましきことも物し給めれはさりともおほすところ
あらむ思なくさめて御ゆなどをたにまいれあなゆゝしやとてかたすみにより居
たりめのと母君なとひかめる心をいひあはせつゝいつしかいかておもふさまに
てみたてまつらむと年月をたのみすくしいまや思かなふとこそたのみきこえつ
れ心くるしき事をも物はしめにみるかなとなけくをみるにもいとおしければい

と、ほけられてひるは日々とひいをのみねくらしよるはすくよかにおきゐてすゝの行ふもしらすなりにけりとててをゝしすりてあふきゐたりてしにもにあはめられて月夜にいて、行道するものはやり水にたふれ入にけりよしあるいはのかたそはにこしもつきそこなひてやみふしたる程になんすこし物まきれける君はなにはのかたにわたりて御はらへし給て住吉にもたいらかにて色／＼の願はたし申へきよし御つかひして申させ給にはかに所せうてみつからはこのたひえまうて給はすことなる御せうえうなどなくていそきいり給ぬ二条院におはしましつきて宮この人も御との人も夢の心ちしてゆきあひよろこひなきともゆゝしきまでたちはきたり女君もかひなき物におほしすてつる命うれしうおほさるらむかしいとうつくしけにねひとゝのほりて御物思ひのほどに所せかりし御くしのすこしへかれたるしもいみしうめてたきをいまはかくてみるへきそかしと御心おちゐるにつけては又かのあかすわかれし人のおもへりしさま心くるしうおほしやる猶よとゝもにかゝるかたにて御心のいとまそなきやその人のことゝもなときこえて給へりおほしいてたる御けしきあさからすみゆるをたゝならずやみたてまつり給らんわさとならす身をは思はすなとほめかし給そをかしうらうたくおもひきこえ給かつみるにたにあかぬ御さまをいかてへたてつる年月そとあさましきまでおもほすにとりかへし世中もいとうらめしうなんほともなくもとの御位あらたまりて数よりほかの権大納言になり給つき／＼の人もさるへきかきりはもとのつかさ返し給はり世にゆるさるゝほとかれたりし木の春にあへる心ちしていとめてたけなりめしありて内にまいり給御前にさふらひ給にねひまさりていかてさる物むつかしきすまるとしへ給つらむとみたてまつる女房などの院の御時さふらひて老しらへるともはかなしくていまさらになきさはきめてきこゆうへもはつかしうさへおほしめされて御よそひなとことにひきつくろひていておはします御心ちれいならて日ころへさせ給ければいたうおとろへさせ給へるを昨日けふそすこしよろしうおほされける御物かたりしめやかにありて夜に入ぬ十五夜の月おもしろうしつかなるにむかしのことかきつくしおほしいてられてしほたれさせ給物心ほそくをほさるゝなるへしあそひなともせず昔きゝし物のねなともきかて久うなりにけるかなとのたまはするにわたつ海にしなへうらふれひるのこのあしたゝさりし年はへにけりとときこえ給へりいとあはれに心はつかしうおほされて

宮はしらめくりあひけるとときしあれはわかれし春のうらみのこすないとな

まめかしき御ありさまなり院の御ために八講おこなはるへきことまついそかせ

給春宮をみたてまつり給にこよなくおよすけさせ給てめつらしうおほしよろこ
ひたるをかきりなく哀とみたてまつり給御さへもこよなくまさらせ給て世をた
もたせ給はむには、かりあるましくかしこくみえさせたまふ入道の宮にも御心
すこし、つめて御たいめんの程にも哀なる事ともあらむかしまことやかのあか
しにはかへる浪に御文つかはすひきかくしてこまやかにかき給めり波のよる
くゝいかに

なけきつゝあかしの浦にあさ霧のたつやと人を思ひやるかなかのそちのむ
すめ五節あいなく人しれぬ物おもひさめぬる心ちしてまくなきつくらせてさし
をかせけり

すまの浦に心をよせしふな人のやかてくたせる袖をみせはやてなとこよな
くまさりにけりとみおほせ給てつかはす

帰てはかことやせましよせたりしなこりに袖のひかたかりしをあかすをか
しとおほししなこりなれはおとろかされ給ていと、おほしいつれとこの比はさ
やうの御ふるまひさらにつゝみ給めり花ちるさとなにもたゝ御せうそなと
はかりにておほつかなく中くゝうらめしけなり